

日本語の母語獲得過程における 所有文と関連表現について

松 藤 薫 子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

要 約 本論文では、日本語の「NP1 には NP2 がある」の形式を持つ所有文と「NP1 の NP2 がある」の形式を持つ絶対存在文の獲得過程を考察した。成人文法では、所有文の統語構造の基底に（絶対存在文の一部である）所有名詞句の構造が含まれる、所有文の意味構造の基底に絶対存在文の構造が含まれるという提案を概観した。成人文法においては所有文と絶対存在文には関係性があると考えられる。子どもの文法においても、所有文は所有名詞句を含む絶対存在文に関連があるのかを比較検討した。明らかになった点は以下の4点である。1つは、所有文が使われ始める2、3歳台に、絶対存在文も使われ始めた。2つめは、絶対存在文で使われる所有名詞句のNP1とNP2の意味関係の範囲は、大人が表す範囲（6種類の意味関係）よりも狭かった。使用当初からタイプA < NP1 と語用論的關係を有する NP2 > が多く見られた。タイプB < NP1 である NP2 >、タイプF < 譲渡不可能名詞 NP2 とその基体表現 NP1 >、タイプE < 行為名詞 NP2 と項 NP1 > も見られるところがあった。3つめは、所有文のNP1とNP2の意味関係の範囲は大人が表す範囲（3種類の意味関係）よりも狭かった。使用当初からタイプFが多く見られた。タイプAも見られるところがあった。4つめは、2、3歳が使う所有文は絶対存在文よりも場所存在文に関係性が強いことを考察した。2、3歳からNP2が表す譲渡可能、譲渡不可能という特徴に気づき、譲渡可能名詞の方が絶対存在文に、譲渡不可能名詞の方が所有文に結び付きやすいという使い分けをしているようだった。大人の使用と違い、所有文で使われる動詞「ある」を存在に近い意味で用い、NP2を指示的名詞として使用していた。

キーワード：日本語の所有文，所有名詞句，絶対存在文，子どもの言語獲得

日獣生大研報 68、21-30、2019.

1. はじめに

所有の概念はヒトに普遍的であると考えられる。それは態度、ジェスチャー、言語などによって表現される。言語で表現される場合は、その形式はさまざまだが、名詞句表現と文表現に大別される。名詞句表現としては、(1) の中で使われている [NP1 の NP2] の形式で、「佐藤さんの高級外車」、文表現としては、(2) のような [NP1 には NP2 がある] の形式を持つ文などがある（NP は名詞句 Noun Phrase、NP に続く数字 1, 2. は NP の現われる順序を示す）。

- (1) これは佐藤さんの高級外車だ。
- (2) 佐藤さんには高級外車がある。

所有関係を表す名詞句 [NP1 の NP2] と所有関係を表す文 [NP1 には NP2 がある] の関連性に関しては、少なくとも2つの考え方があり。1つは、両者はそれぞれ統語的にも意味的にも独立しているという見方である。それぞれの統語構造は併合（Merge）という操作によりボトムアップ

で生成され、それぞれの形式の意味は合成（Compositionality）により単語の意味の総和で表す。もう1つの考え方は、両者は関連しているというものである。例えば、一方の形式の特徴の中にもう一方の特徴が使用されている、などが考えられる。

本論文では、所有関係を表す2つの形式に関連があるという可能性を探求する。2節では日本語の成人文法で、2つの形式が統語的・意味的にどのように関連しているのかを考察する。3節では子どもの発話に基づき、関連性を示す証拠があるのかを考察する。4節で本論文の結論を述べる。

2. 成人文法による所有文と関連表現

2.1 統語構造

Tsujioka (2002) と Myler (2016) に基づき、日本語の所有文の統語構造を考察する。両者の分析では、機能範疇の投射である所有句 PossP (Possession Phrase) が仮定され、所有物が2つに分類されている。所有物の1つが譲渡

可能な名詞類 (Alienable class) に属し、例えば車、宝石などである。もう 1 つが譲渡不可能な名詞類 (Inalienable class) に属し、例えば手、情熱などである。譲渡不可能な名詞類のほうが意味的にその所有者との関係性が強い (Tsujioka 2002: 117, Aikhenvald 2013: 12)。このことが統語的にも反映するように、所有者との生起位置関係が譲渡可能な所有物より譲渡不可能な所有物の方が近くにある。統語構造上では、所有物が譲渡可能かどうかで所有者の生起位置が異なる。譲渡可能な所有物の所有者の現れる位置が、譲渡不可能な所有物の所有者が現れる位置より上にある。所有文の統語構造は、まず基底構造が生成され、次に派生構造が生成されると仮定されている。

(3) のような譲渡可能な所有物を含む所有文と譲渡不可能な所有物を含む所有文がどのような統語構造を持つかを樹形図で示す。

- (3) a. 佐藤さんに高級外車がある。(譲渡可能な所有物の所有文: Fig.1, Fig.3)
- b. 佐藤さんに情熱がある。(譲渡不可能な所有物の所

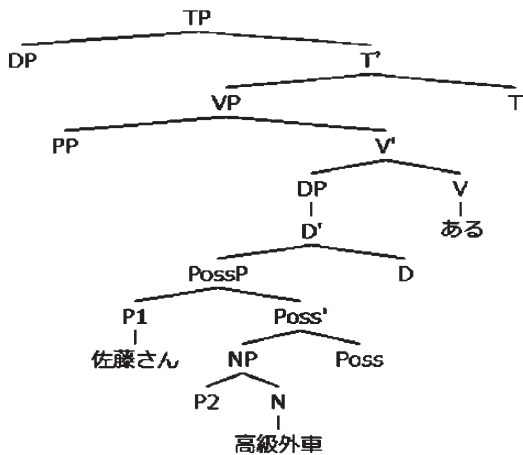


Fig. 1. 基底構造：譲渡可能な所有物の場合

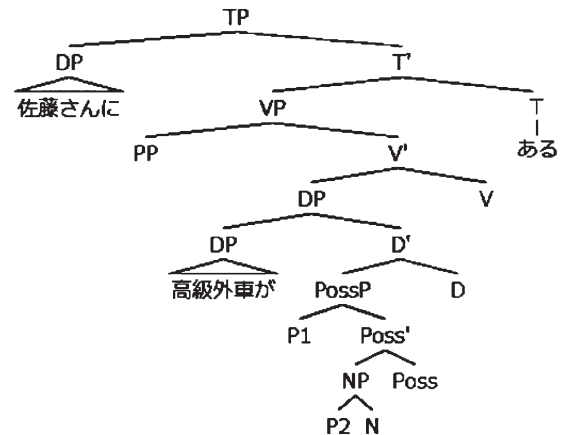


Fig. 3. 派生構造：譲渡可能な所有物の場合

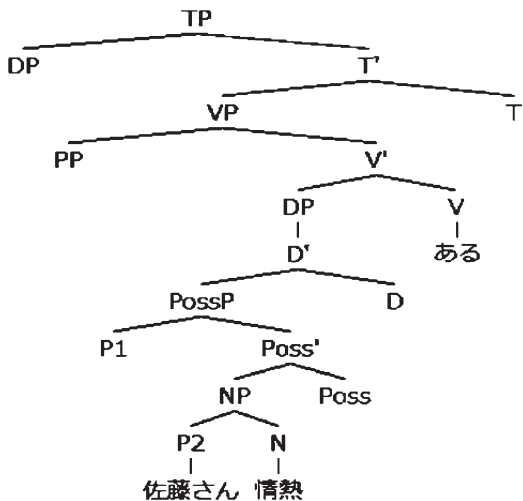


Fig. 2. 基底構造：譲渡不可能な所有物の場合

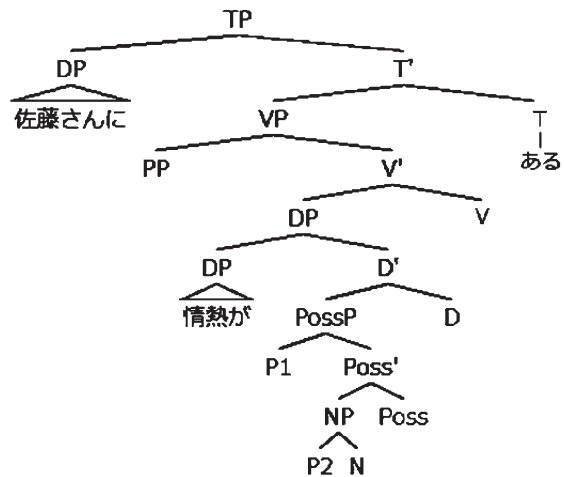


Fig. 4. 派生構造：譲渡不可能な所有物の場合

有文: Fig.2, Fig.4)

(3a) は譲渡可能な所有物である「高級外車」を含む所有文で、その基底構造の樹形図が Fig.1、派生構造が Fig.3 である。P1 が譲渡可能な所有物の所有者が現れる位置である。(3b) は譲渡不可能な所有物である「情熱」を含む所有文で、その基底構造が Fig.2、派生構造が Fig.4 である。P2 が譲渡不可能な所有物の所有者が現れる位置である (括弧を使った統語構造は Appendix 1 参照)。

Fig.1 から Fig.4 の所有文の基底構造と派生構造には、所有関係を表す名詞句 (PossP を含む DP) が下層部にあることがわかる。この PossP を含む DP とは「佐藤さんの高級外車」「佐藤さんの情熱」などの名詞句表現の統語構造である。

2.2 意味構造

2.1 節で、統語的観点から、所有文に所有関係を表す名詞句が含まれることをみた。NP1 と NP2 が所有関係を表す代表的な名詞句の形は、「NP1 の NP2」である。西山 (2003, 2013) と西川 (2013) に基づき、「NP1 の NP2」は

どのような意味を表すのか、所有文「NP1にはNP2がある」はどのような意味を表すのか、両者の関係はどのようなになっているのかの3点を以下、概観する。

「NP1のNP2」が表す意味タイプは、NP1とNP2の間の意味的緊張関係という観点から(4)のように6つのタイプに分類される。()内の名詞句表現は当該タイプの具体例である。

- (4) a. タイプA: NP1と関係Rを有するNP2(「山田先生の本」「ピアノの音」など)
 b. タイプB: NP1であるNP2(「看護婦の洋子」「病気の父」など)
 c. タイプC: 時間領域NP1における、NP2の指示対象の断片の固定(「着物を着た時の母」「大正末期の東京」など)
 d. タイプD: 非飽和名詞NP2とそのパラメータNP1(「太郎の妹」「この小説の作者」など)
 e. タイプE: 行為名詞NP2と項NP1(「田中先生の忠告」「物理学の研究」「夏目漱石の研究」など)
 f. タイプF: 譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1(「次郎の歯」「家の玄関」など)

(西山2013:5, 西川2013:65-66)

(4a)の関係RのスロットRの具体的な値は、具体的な発話状況(コンテキスト)のなかで語用論的に補充されるべきものである。例えば、「山田先生の本」は、最も自然な解釈は、<山田先生が所有している本>であるかもしれないが、コンテキストにより<山田先生が手に持っている本><山田先生が執筆した本><山田先生が買ったがっている本>など他の解釈も可能である。NP2に対するNP1による限定の仕方は、所有に限られるものではないことがわかる。(4d)の非飽和名詞とは、パラメータを含むため、パラメータの値を具体的に定めない限り、単独では外延を定めることができず意味的に充足しない名詞のことである。例えば、「太郎の妹」では、非飽和名詞「妹」は、「誰(X)の」というパラメータの値が設定されて初めて<太郎の親族のうちで妹である人>というひとまとまりの意味が構築される。(4e)のタイプEでは、行為名詞NP2に対してNP1が主語である場合<田中先生が忠告する>やNP1が補部(Complement)である場合<物理学を研究する>や両方可能である場合<夏目漱石が研究する><夏目漱石を研究する>がある。

「NP1のNP2」が表す6つの意味タイプは純粋に意味論を含む文法レベルでタイプ分けされている。「NP1のNP2」の形式を持つ個々の表現は、具体的な発話の中で使われた場合、複数の解釈を持つ場合がある。「田中先生の忠告」は言語的意味としてタイプEに分類される。それらが具体的なコンテキストで使われた場合、<田中先生が考えている忠告><田中先生が述べた忠告><田中先生に関する忠告>などタイプAの読みも可能となる。

所有文は一般に「NP1(に)はNP2が{ある/いる}」

という形式をとり、NP1が所有者、NP2が所有の対象物とされる。(5)がその具体例である。

- (5) a. 佐藤さんには夫がいる。
 b. 佐藤さんには才能がある。
 c. 佐藤さんは熱がある。
 d. 佐藤さんには高級外車がある。

所有文は場所存在文と形式が似ている。場所存在文も「NP1にNP2が{ある/いる}」という形式が使われる。場所存在文とは、「NP1にNP2が{ある/いる}」という形式が用いられ、NP1は場所を指示する指示的名詞、NP2は個体を指示する指示的名詞が使われ、<NP1にNP2が位置している>という意味が表される。

しかし、所有文は場所存在文とは本質的に異なる。第一に、所有文の場合「に」が省略可能である。(6a)のように「NP1はNP2がある」は文法的で自然な形式である。場所存在文の場合は(6b)のように「に」の省略は原則、許されない。(6)で使われた記号*と?は、*が非文法的、不自然な文であること、?が非文法的、やや不自然な文であることを示す。

- (6) a. 佐藤さんは夫がいる。佐藤さんは才能がある。佐藤さんは高級外車がある。
 a'. 佐藤さんには夫がいる。佐藤さんには才能がある。佐藤さんには高級外車がある。
 b. *あの机の上はリンゴがある。
 ?あの広間は、学生がたくさんいる。
 b'. あの机の上にはリンゴがある。
 あの広間には、学生がたくさんいる。

第二に、場所存在文のNP2は指示代名詞であるが、所有文のNP2は変更名詞句の主要部である。変更名詞句とは、(7a)の形式を持つ(7b)のような文において、(7c)のような言語的意味のなかで、[xが洋子の指導者である]という命題関数F(x)を表示する名詞句Aのことである。(7b)の変更名詞句の部分「洋子の指導者」を所有文にすると(8)のような文になり、所有文のNP2は変更名詞句の主要部を占める「指導教授」となる。

- (7) a. AはBだ
 b. 洋子の指導教授はあのひとだ。
 c. [xが洋子の指導者である]を満たすxの値はあのひとだ。

- (8) 洋子には指導教授がいる。

第三に、場所存在文ではNP1はNP2が所在する位置を表す場所辞であり、NP1とNP2との間には内的な意味関係はない。所有文においては、NP1とNP2にはある種の内的な意味関係がある。(9)において、場所存在文である場合は、フランスという地理空間に、ある国(例えば、モナコ)の国王が所在するという意味である。所有文である場合は、「国王」は「フランスの国王」であり、「フランス」は地理空間を表す場所辞ではなく、フランス国家を表す所有者である。

(9) フランスには、国王がいる。

所有文「NP1 には NP2 がある」における NP1 と NP2 の意味的關係に関して、西山 (2013:288-291) は、所有文に対する絶対存在文「NP1 の NP2 が存在する」における「NP1 の NP2」に注目して考察する。絶対存在文とは、「A が存在する」という存在文における存在主体 A を表す名詞句が命題関数 $F(x)$ を表す変更名詞句であり、文全体が変更の値の有無多少を述べているタイプの存在文のことである (西山 2013:254, 257)。

(10) (11) (12) は所有文とそれに対応する絶対存在文と絶対存在文の意味構造の例である。(10a) (11a) (12a) の所有文は、それぞれ (10b) (11b) (12b) のような絶対存在文に近い意味を持ち、(10c) (11c) (12c) のような意味構造を持つ。

- (10) a. 田中先生には本がたくさんある。
- b. 田中先生の本がたくさん {存在する/ある}。
- c. [x が田中先生の本である] を満たす x の値がたくさん存在する
- (11) a. 太郎は妹がいる。
- b. 太郎の妹が {存在する/いる}。
- c. [x が太郎の妹である] を満たす x の値が存在する
- (12) a. この車にはカーナビがある。
- b. この車のカーナビが {存在する/ある}。
- c. [x がこの車のカーナビである] を満たす x の値が存在する

(10b) に関しては、主語名詞句「田中先生の本」は先に見た (4) に基づくと、NP1「田中先生」と NP2「本」との間の関係 R を有する、つまり語用論的關係のタイプ A である。語用論的には (13) のような多様な解釈が可能である。NP1 と NP2 の間の意味關係は、狭い意味での所有關係とは限定されない。(13a) だけが、田中先生と本の間に関係を表している。

- (13) a. <田中先生は、所有している本がたくさんある>
- b. <田中先生は、執筆した本がたくさんある>
- c. <田中先生について書かれている本がたくさんある>
- d. <田中先生は、書評を書くことになっている本がたくさんある>

(11b) の「太郎の妹」はタイプ D <非飽和名詞 NP2 とそのパラメータ値 NP1 の関係>、(12b) の「この車のカーナビ」はタイプ F <譲渡不可能名詞 NP2 とその基体

表現 NP1 の関係>である。

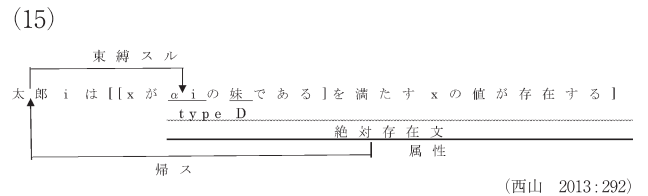
所有文「NP1 には NP2 がある」における NP1 と NP2 の意味關係は、(4) の 6 タイプのうちタイプ A・タイプ D・タイプ F の 3 タイプのいずれかであることがわかる。

以上を表にまとめると、Table 1 になり、所有文「NP1 には NP2 がある」は場所存在文よりも絶対存在文のほうに密接に關係している。

ただし、所有文と絶対存在文は、意味は近いが同一ではない。

- (14) a. 太郎の妹がいる。
- b. 太郎には妹がいる。
- (14a) の絶対存在文では、太郎の妹の存在を主張する。
- (14b) の所有文では、太郎について、彼の妹の存在を叙述している。

最後に、(14b) の所有文の意味構造は、(15) のように示される。



(15) では、「太郎」は「 a_i の妹」の a_i を束縛している。そして「 a_i 」と「妹」の關係は、<パラメータと非飽和名詞の關係> (タイプ D) である。「 a_i の妹」は [x が a_i の妹である] という命題関数を表す変項名詞句である。波線部はその変項 x の値が存在することを述べている絶対存在文である。この絶対存在文は太郎について叙述している属性を表している。意味構造 (15) は、絶対存在文を内蔵した措定コーピュラ文である。措定とは、ある事物の存在を肯定し、その内容を明白にして示すことである。

「NP1 の NP2」は 6 つの意味タイプを表すこと、所有文「NP1 には NP2 がある」の意味構造は「NP1 の NP2 がある」という絶対存在文の意味構造を含み、前述の 6 つの意味タイプのうち 3 つの意味タイプを表すことをみた。

3. 子どもの文法による所有文と関連表現

3.1 先行研究

2 節でみたように、日本語の成人文法では所有文の意味

Table 1. 絶対存在文、所有文、場所存在文の比較

	絶対存在文	所有文	場所存在文
所有者につく「に」		省略可能	省略できない
NP2	変項名詞句の主要部	変項名詞句の主要部	指示的名詞
NP1 と NP2 の意味關係	ある種の意味關係 6 タイプ	ある種の意味關係 3 タイプ	内的な意味關係はない。NP1 は NP2 が所在する位置を表す場所辞

構造の基底に所有名詞句を含む絶対存在文の意味構造が含まれる(西山 2003, 2013)、所有文の統語構造の基底に所有句を含む名詞句が含まれる(Tsujioka 2002, Myler 2016)ことが提案されている。成人文法における考察を踏まえ、子どもの言語獲得研究からも、所有文と所有名詞句やそれを含む絶対存在文と関連があるのかを検討する。

どの言語においても所有表現の獲得研究のほとんどが所有名詞句を対象とし、「ねーちゃんのぶーぶー」、John's car のような限定詞句や John's brother's car のような再帰的所属句に見られる、統語論の分野の機能範疇の存在や再帰性の存在を検証するものであった(Marinis 2016 他、多数)。所有の概念は、例えば「所有者人間と所有物である価値ある無生物が近接関係にあり、所有者は所有物の独占権があり所有関係が長期にわたる」(Taylor 1996)のように複雑な概念である。所有の概念が複雑で捉え難く、「状態」の意味(例:感情・知覚・感覚・所有など)を子どもが獲得しているかを確認する調査手法が難しいことから所有の概念や所有表現の意味の獲得過程はあまり分かっていない(絵本による英語 mommy's shoe などの理解確認研究については Golinkoff and Markessini 1980 を参照)。

どの言語を獲得する子どもでも形式として所有名詞句を先に獲得してからその後所有文を獲得する(Marinis 2016, Clancy 1985, Radford 1990, Tomasello 1992, Golinkoff and Markessini 1980, 松藤 2018 など)。日本語の獲得過程では、所有名詞句の形態に関しては2歳前後に(16)のような段階の表現がみられる。発達のスピードにより、4段階(16a)(16b)(16c)(16d)を経る子どももいれば、2段階(16a,b)を経て(16c)を飛ばし(16d)を示す子どももいる。(16)には、発話に使われた形式、()の中に発話例、' 'の中にコンテキストから推測される発話の意味内容、発せられた年齢、例えば(1;5)は1歳5ヵ月を示す。格助詞「の」は2歳0ヵ月位から生産的に(NP1とNP2に現れる人や物の名前を変えながら頻繁に)使われる(Marinis 2016: 452-453)。

- (16) a. NP1 (のりこちゃん) 'わたしの:自分の' (1;5)
 b. NP1 の (のりこちゃんの) (1;8)
 c. NP1 NP2 (ねーちゃんぶーぶー)
 'ねーちゃんの車' (1;11)
 d. NP1 の NP2 (よっちゃんのおちんちん
 おおさかのおじいちゃん) (2;2)-(2;4)

(Clancy 1985: 483-485)

所有名詞句の意味に関しては、所有の意味が普遍的であると仮定され、獲得されるものではないとみなす研究もある(Marinis 2016: 455)。例えば2歳児の発話例「Cちゃんのくすり」'観察児仮称Cちゃんの薬'(2;0)(松藤 1992)において、所有者である名詞句「Cちゃん」と所有物である名詞句「くすり」の間に所有格「の」が使われると2歳児が成人文法の言語知識を獲得しているように分析される。しかし、子どもが所有格の形態を使用するようになったとき、所有の概念をすでに獲得し、その名詞句で成

人と同じような所有の意味を表しているのかは不明である(Golinkoff and Markessini 1980)。

所有文に関して、松藤(2015, 2018)は、縦断的自然発話資料と横断的誘出調査に基づき、(17)のような形式と意味の結びつきを明らかにした。所有の概念は Taylor (1996: 340), Heine (1997: 38-39) が用いた家族的類似性に基づき、「所有者人間と所有物である価値ある無生物が近接関係にあり、所有者は所有物の独占権があり、所有関係が長期にわたる」という全特徴を満たすものを典型的所有関係、それから逸脱するものを非典型的所有関係と捉えた。

- (17) a. NP1 は NP2 がある - - - 非典型的所有関係 [生物とその属性の関係、NP1 と NP2 の関係性]
 b. NP1 {は/には} NP2 がある - - - 非典型的・典型的所有関係
 # 「NP1 に NP2 がある」は観察されなかった。

(松藤 2018: 25)

自然発話資料分析により、所有文は2歳台から使われ始めた。人間や動植物が具体的属性を備えていることを表す文や人間が身の回りの具体的物体を所有していることを表す文が2歳台から使われた。使用当初は人間や動植物の具体的属性の具備を表す文の使用頻度が多かった。所有物は単なる物の名前ではなく、(大人の使用と似ていて)所有物が少し目立つように修飾語のついた表現が用いられた。所有者につく格助詞は大人と異なり、使われないことが多かった。そして「には」は全く使われず、「は」が観察されるところがあった。所有物につく「が」は3歳前後から観察された。誘出調査により、典型的所有を表す所有文の所有者につく助詞「には」は5歳9ヵ月ごろから使うことができるようになることを確認した。

所有名詞句を含む絶対存在文に関する獲得研究はまだなされていないようである。

以上の日本語の成人文法と言語獲得に関する先行研究を踏まえ、本論文では日本語の獲得過程において問題となる(18)の4点を考察する。

- (18) a. 絶対存在文「NP1 の NP2 がある」の形式を持つ文、たとえば、「ママの車がある」のような発話文が観察されるのか。
 b. 観察されるならば、絶対存在文の所有名詞句 NP1 の NP2 はどのような意味関係を表すのか。
 c. 所有文「NP1 には NP2 がある」の NP1 と NP2 はどのような意味関係を表すのか。
 d. (18b) と (18c) に関係性がみられるのか。

3.2 自然発話資料分析

本論文では、口頭言語のデータベース CHILDES (チャイルズ、Child Language Data Exchange System) から日本語児2人の発話データを CLAN (Computerized Language Analysis) プログラムの KWAL (Key Word and Line) コマンドで特定の単語を探し分析した (MacWhinney 2000, 宮田 編 2004)。一人は野地 (1973-

Table 2. S 児の各年齢の絶対存在文の数とそれが表す意味タイプの数と割合

	該当する発話文数	A	B	C	D	E	F
2 歳台	27 (100%)	23 (85.19%)	2 (7.41%)	1 (3.70%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3.70%)
3 歳台	8 (100%)	3 (37.50%)	2 (25.00%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (37.50%)
4 歳台	12 (100%)	7 (58.33%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (16.67%)	1 (8.33%)	2 (16.67%)
5 歳台	14 (100%)	5 (35.71%)	6 (42.86%)	1 (7.14%)	1 (7.14%)	0 (0%)	1 (7.14%)
6 歳台	2 (100%)	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

1977) に基づく S 児 (0;0-6;11) のデータで、もう一人は、MiiPro コーパスの一部である N 児 (1;2-5;0) のデータである (Nisisawa & Miyata 2009)。この 2 人の発話資料は、比較対照するため、所有文を分析した松藤 (2015) に使用した発話資料と同じものである。発話資料から「NP1 の NP2 (が) {ある / おる}」の形式を持つ発話文を取り出した (詳細は Appendix 2 を参照)。分析に使用する意味タイプは、2.2 節でみた西山 (2013) と西川 (2013) による NP1 と NP2 の間の意味関係 (4) を使用する。

3.2.1 S 児の発話

絶対存在文「NP1 の NP2 がある」の形式を持つ発話文に関しては、2 歳から使われている。‘ ’ の中身は筆者が前後のコンテキストから判断した意味内容である。

- (19) a. とうちゃん の かっこ ある の (2;0)
 ‘父さんがよく履いている下駄がある’
 b. わんわん の ぼんぼん が ある (2;1)
 ‘犬がしたうんこがある’
 c. ゆうべ の いもちゃん が ある (2;2)
 ‘昨夜 (夕食で) 見た芋がある’

NP1 と NP2 の間の意味関係 (4) に基づくと (19a) (19b) の NP1 と NP2 はタイプ A の語用論的意味関係を示し、(19c) はタイプ C の時間的領域 NP1 における NP2 の指示対象の固定を表している。

S 児の発話資料にある 2 歳から 6 歳までの絶対存在文の発話文数とその文の NP と NP2 の意味関係のタイプ分類をすると、Table 2 になる。大人が絶対存在文を使用する場合、NP1 と NP2 の意味的關係は 6 種類 (タイプ A~F) である。

2 歳から絶対存在文「NP1 の NP2 (が) ある」が使われる。A タイプの表現が 2 歳台で多く発話されている。2 歳から B タイプや C タイプや F タイプの表現もみられる。C タイプや D タイプや E タイプの表現の使用頻度は低い。(20) から (24) はそれぞれの意味タイプの具体的な発話例である。

- (20) B タイプ: いぬのあかちゃん が おる (2;5)、
 おかあちゃん おいものおかし ある?
 (2;10)
 (21) F タイプ: おかあちゃん わんわんのおてて あ

Table 3. S 児の各年齢の所有文の数とそれが表す意味タイプの数と割合

	該当する発話文数	A	F	D
2 歳台	11 (100%)	2 (18.18%)	9 (81.82%)	0 (0%)
3 歳台	8 (100%)	6 (75.00%)	2 (25.00%)	0 (0%)
4 歳台	1 (100%)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
5 歳台	4 (100%)	1 (25.00%)	3 (75.00%)	0 (0%)
6 歳台	1 (100%)	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)

- る? (2;9)、ちょうちょうのおくち ど
 こに あるん? (3;3)
 (22) C タイプ: ゆうべ の いもちゃん が ある
 (2;2)、むかしのきしゃ が いまごろ
 おるか (5;5)
 (23) D タイプ: ひのあと が あるでしょう ‘火の跡が
 あるでしょう’ (4;1)、きしゃのレール
 が あるでしょうが (4;11)
 (24) E タイプ: おかあちゃん うしのけんか が ある
 ゆうた けん みに いこうや (4;9)

2 歳から 6 歳までの所有文の発話文数とその文の NP1 と NP2 の意味関係のタイプ分類をすると、Table 3 になる。大人が所有文を使用する場合、NP1 と NP2 の意味的關係は 3 種類 (タイプ A、D、F) である。

2 歳から所有文「NP1 (は) NP2 (が) ある」が使われる。F タイプの表現が 2 歳台で多く使われている。A タイプの表現は 3 歳台で多く使われている。D タイプの表現はどの年齢においても観察されなかった。(25) (26) は F タイプと A タイプの具体的な発話例である。

- (25) F タイプ: これ がが ある ‘がが: 骨、魚に骨が
 ある’ (2;1)、わんわん おねつがある
 (3;2)
 (26) A タイプ: ぼく おかね あるんよ (2;10)、おば
 あちゃん おかねが たくさん ある
 の? (4;0)

絶対存在文の NP1 と NP2 は様々な意味を表すため、成人文法の観点から所有関係を表しているとみなせるものという意味タイプと所有文の意味タイプを比較して、その両者の関係性を考察する。

2歳台の絶対存在文にみられるNP1とNP2の具体例は、(27)のように語用論的意味関係のAタイプと譲渡不可能名詞とその基体のFタイプである。

(27) a. Aタイプ：父と下駄、ぼくと三輪車、父と傘、蝉と家、おばあちゃんと家

b. Fタイプ：犬と手

2歳台の所有文にみられるNP1とNP2の具体例は、(28)のようにAタイプとFタイプである。

(28) a. Aタイプ：ぼくと着物、ぼくとおかね

b. Fタイプ：魚と骨、僕と歯、魚と骨、ごはんと骨、豆と骨、昆布と骨、リンゴと種、ぼくと熱、機関車と煙突

3歳台の所有文にみられるNP1とNP2の具体例は、(29)のようにAタイプとFタイプである。

(29) a. Aタイプ：ぼくと洋服、ぼくと置く場所、ぼくとおまけ磁石、トラックと用事、母と仕事、ぼくらとあめやウエハースやらたくさん

b. Fタイプ：犬と熱、蝶々と手

2歳台の絶対存在文に使われているAタイプの名詞句(27a)をみると、NP1は自分やそれ以外の人たち、NP2は物である。S児はNP1とNP2にはなんらかの関係があることを認識している。このようなNP1とNP2の関係性が弱い場合に両者を「の」で結び付けている。所有文に使われているAタイプの名詞句(28a)(29a)をみると、NP1はNP2をコントロールできるS児本人か、NP2を行う人である。NP1とNP2の関係性が強い場合は、NP1を(話題の役割にするため)文頭に置いていると考えられる。

2歳から名詞句の譲渡可能、譲渡不可能の意味的特徴に敏感になる。それが構文に反映されている。Table 4の2歳台の行部分が示すように、絶対存在文ではAタイプが最多で、所有文ではFタイプが最多となっていることから、譲渡可能名詞の方が絶対存在文に、譲渡不可能名詞の方が所有文に結び付きやすい傾向がある。

3.2.2 N児の発話

S児の発話文に基づく観察がN児にもあてはまるのかを以下考察する。

N児の絶対存在文「NP1のNP2がある」の形式を持つ発話文に関しては、3歳1ヵ月から使われている。1歳台、2歳台、5歳台の資料からは絶対存在文は観察されなかった。(30)のように3歳台に4文と4歳台に1文、合わせて5文が使われた。発話文とそれが使われた年齢の後に示された[]には、その発話文で使われた名詞句NP1とNP2の間の意味関係を(4)に基づいたタイプ名で示す。

(30) a. あの にしむらせんせい の はなし が ある ん です よ (3;1) [E]

b. あ だれか の わすれもの が ある よ (3;3) [A]

c. どうか の ふろく が あん の? (3;4) [A] 'ふろく：付録'

Table 4. S児の各年齢の所有関係を表す絶対存在文と所有文が表す意味タイプの数

	絶対存在文			所有文		
	A	F	D	A	F	D
2歳台	5	1	0	2	9	0
3歳台	1	3	0	6	2	0
4歳台	3	2	1	1	0	0
5歳台	2	1	1	1	3	0
6歳台	1	0	0	0	1	0

d. ねー なんて みずいろ の おはな が ある の かなあ? (3;11) [F] 'みずいろのおはな：水色のお花'

e. ピザ に あの ほら ぐにゆぐにゆ の おにく とか あって (4;7) [A] 'ぐにゆぐにゆのおにく：牛乳のお肉'

(30a)のNP1とNP2はタイプEの行為名詞とその項の関係、(30b)(30c)(30e)はタイプAの語用論的意味関係を示し、(30d)はタイプFの譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1を表している。大人が絶対存在文を使用する場合、NP1とNP2の意味的關係は6種類(タイプA~F)である。

絶対存在文においてN児によって使われるNP1とNP2の関係性は弱い。AタイプのNP1とNP2の具体例は、「誰かと忘れ物」「どこかと付録」「牛乳とお肉」である。

所有文の発話文例とその文のNP1とNP2の意味関係のタイプは(31)のようになる。大人が所有文を使用する場合、NP1とNP2の意味的關係は3種類(タイプA, D, F)である。

(31) a. これ ちんが あるんです (3;0) [F] 'N児(仮想のぼく)にはちんちんがあるんです'

b. なっちゃん これ、とー これ とー これとか これとか これとか これと これとか これとかー ある (3;4) [A]

c. お父さん ここに まゆ まゆげ とこうゆうのが あるね (3;11) [F]

d. なんて だんごむしが あしが いっぱい ある の? (4;0) [F]

e. これは とげがある これとこれ りょうぼうが (4;3) [F] 'カードには角がある'

f. なっちゃんね おかあさんに 大事な話があるから ちょっと きいて (4;4) [E][A]

g. こっちは もう ヌットラが あんじゃない? (4;6) [A] '私たちには、もうドラゴン ヌットラがあるんじゃない?'

h. うん たくあんて いろんな色が あるんだよね (4;7) [F]

i. ジャ 私 おしごとが あるのよ (5;1) [E][A]

所有文においてN児によって使われるNP1とNP2の

Table 5. S児とN児の絶対存在文、所有文、場所存在文の比較

	絶対存在文	所有文	場所存在文
NP1につく助詞	「の」	使われない>「は」>「に」	「に」
NP2	変項名詞句	指示的名詞に近い	指示的名詞
NP1とNP2 の意味関係	A>>B,F,E 語用論的關係が多い	F>>A 基体と譲渡不可能なものが多い	NP1はNP2が所在する 位置を表す
動詞「ある」の意味	存在	存在に近い	存在

関係性は強い。まずタイプFが多く表現されている。タイプAの場合は、NP1が自分(たち)であり、NP2をコントロールできる人である。

S児もN児も、2,3歳から名詞句の譲渡可能、譲渡不可能の意味特徴に敏感になるようだ。それが構文に反映され、譲渡可能名詞の方が絶対存在文に、譲渡不可能名詞の方が所有文に結び付きやすい傾向があるように思われる。

3.3 考察

以上3.2節の分析結果と松藤(2015, 2018)に基づき、2,3歳のS児とN児が使った絶対存在文と所有文と場所存在文を比較し、その時期の所有文はどちらに似ているかを考察する。Table 5は、3種類の文をNP1につく助詞の種類、NP2の意味的内容、NP1とNP2の間の意味関係を表すタイプ、動詞「ある」の意味の4つの観点から分析した結果である。>は>より使われた頻度が多いことを示す。

所有文が表す多くの意味関係はタイプF<譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1>である。その基体表現NP1は、助詞があまり使われない形で文頭の位置で発話される。そのタイプFの意味関係が絶対存在文ではあまり表されていない。タイプFの所有文の意味構造に絶対存在文の構造が埋め込まれているとは考えにくい。タイプFの所有文のNP1とNP2の間に内的意味関係があるかは定かではない。話題としての助詞「は」は2歳前後から使われることが報告されている(Clancy 1985:381)。「話題である指示的名詞NP1に関して指示的名詞NP2が存在する」ことを所有文で表現しようとしていると考えられる。絶対存在文と場所存在文と同様、所有文もそこに使われる「ある」という動詞は存在に近い意味である。所有文のNP1に、NP2をコントロールできる「人」が表されるようになると、「ある」が表す存在の意味が薄れていくと考えられる。獲得最終段階では、NP1とNP2の所有関係が非典型的なものから典型的なものまで十分に獲得され、大人の使用と同様に動詞の実質的な意味がなくなる(Myler 2016)と分析できる。

以上から2,3歳の所有文は絶対存在文より場所存在文に似ていると考えられる。成人と同様の所有文が使えるようになるまでには、NP1とNP2の内的な意味関係、所

有関係、所有者につく助詞「に」「には」の獲得が必須となる。

子どもは所有関係をどのように獲得するのだろうか。NP1「人」をNP2「物」の属性とみなすような物的なとらえ方を基盤にしているのだろうか。あるいは、(NP2の「物」が移動した結果、)NP2「物」はNP1「人」のそばにありNP1「人」がNP2「物」をコントロールできる状態であるという出来事的なとらえ方をしているのだろうか。後者の場合、NP1「人」が担う所有者という意味を、NP2「物」のPLACE(場所)、SOURCE(出所)、GOAL(目的地)など、どのような概念を基盤として獲得するのかは今後の課題としたい。

4. まとめ

本論文では、日本語の「NP1にはNP2がある」の形式を持つ所有文と「NP1のNP2がある」の形式を持つ絶対存在文の獲得過程を考察した。成人文法では、所有文の統語構造の基底に(絶対存在文の一部である)所有名詞句の構造が含まれる、所有文の意味構造の基底に絶対存在文の構造が含まれるという提案を概観した。成人文法においては所有文と絶対存在文には関係性があると考えられている。子どもの文法においても、所有文は所有名詞句を含む絶対存在文に関連があるのかを比較検討した。明らかになった点は以下の4点である。1つは、所有文が使われ始める2,3歳台に、絶対存在文も使われ始めた。2つめは、絶対存在文で使われる所有名詞句のNP1とNP2の意味関係の範囲は、大人が表す範囲(6種類の意味関係)よりも狭かった。使用当初からタイプA<NP1と語用論的關係を有するNP2>が多く見られた。タイプB<NP1であるNP2>、タイプF<譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1>、タイプE<行為名詞NP2と項NP1>も見られるところがあった。3つめは、所有文のNP1とNP2の意味関係の範囲は大人が表す範囲(3種類の意味関係)よりも狭かった。使用当初からタイプFが多く見られた。タイプAも見られるところがあった。4つめは、2,3歳が使う所有文は絶対存在文よりも場所存在文に関係性が強いことを考察した。2,3歳からNP2が表す譲渡可能、譲渡不可能という特徴に気づき、譲渡可能名詞の方が絶対存在文に、譲渡不可能名詞の方が所有文に結び付きやすいとい

う使い分けをしているようだった。大人の使用と違い、所有文で使われる動詞「ある」を存在に近い意味で用い、NP2を指示的名詞として使用していた。

Appendix

1) (3a) (3b) のもう一つの統語構造の表記は以下のようになる。

A. 基底構造

(3a') [TP[DP][T'[VP PP[V'[DP[D'[PossP[P1 佐藤さん][Poss'[NP[P2][N 高級外車]]Poss]]D]]V ある]]T]

(3b') [TP[DP][T'[VP PP[V'[DP[D'[PossP[P1][Poss'[NP[P2 佐藤さん][N 情熱]]Poss]]D]]V ある]]T]

B. 派生構造

(3a'') [TP[DP^ 佐藤さんに][T'[VP PP[V'[DP[DP^ 高級外車 が][D'[PossP[P1][Poss'[NP[P2][N]] Poss]]D]]V]]T ある]

(3b'') [TP[DP^ 佐藤さんに][T'[VP PP [V'[DP[DP^ 情熱が][D'[PossP[P1] [Poss'[NP[P2][N]] Poss]]D]]V]]T ある]

樹形図の作成は、Syntax tree generator Copyright (C) 2011 by Miles Shang <mail@mshang.ca> を使用した。

2) 発話資料からの絶対存在文の取り出し方は以下の方法を使用した。CLAN プログラムの KWAL コマンドを使い、特定の単語を探し、それを含む文の一覧表を作成する。使用したコマンドは、(a) (b) のようなものである。

(a) KWAL+t*SUM+s"no"+s"aru"+w2-w2+f@

(b) KWAL+t*CHI+s"no"+s"aru"+o%ort+w2-w2+f@

(a) で使われたオプションの機能に関して、+t オプションは発話者 (S 児; SUM, N 児; CHI) を指定し、+s はキーワード no「の」aru「ある」を指定し、+w2-w2 はキーワード (両方または一方) を含む発話の後の発話 2 文を表示させ、+f は検索結果ファイルを保存し、@ は指定されたファイルを検索するという機能である。(b) の+o は発話ライン (メインライン) に付属するディペンデントティア、%ort は仮名漢字で入力された発話が表示される。

引用文献

Aikhenvald, A. Y. (2013) Possession and Ownership: A Cross-linguistic Perspective. In A. Y. Aikhenvald and Dixon, R. M. W. (eds.) *Possession and Ownership: A*

Cross-linguistic Typology, 1-64, Oxford University Press.

Clancy, P. M. (1985) The Acquisition of Japanese. In D. I. Slobin (ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition, Vol. 1. The Data*, 373-524, Lawrence Erlbaum Associates.

Golinkoff, R. M and Markessini, J. (1980) "Mommy Sock": The Child's Understanding of Possession as Expressed in Two-Noun Phrases, *Journal of Child Language* 7(1), 119-135.

Heine, B. (1997) *Possession*. Cambridge University Press.

MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk* (3rd edition). Lawrence Erlbaum Associates.

Marinis, T. (2016) Acquiring Possessives. In Lidz, J., Snyder, W. and Pater, J. (eds.) *Oxford Handbook of Developmental Linguistics*, 435-462, Oxford University Press.

松藤薫子 (1992) 「ある日本語習得児の観察記録 2才0ヶ月から2才9ヶ月まで」お茶の水女子大学大学院英文学会編、『えちゅーど』第22号, 117-130.

松藤薫子 (2015) 「日本語の叙事的所有表現の獲得に関する予備的考察」『日本獣医生命科学大学研究報告』64, 34-43.

松藤薫子 (2018) 「日本語の所有文の獲得について」『日本獣医生命科学大学研究報告』67, 18-29.

宮田 Susanne 編 Brian MacWhinney 監修 (2004) 『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ書房.

Myler, N. (2016) *Building and Interpreting Possession Sentences*. The MIT Press.

西川賢哉 (2013) 「[NP1 の NP2] タイプ F 譲渡不可能名詞 NP2 とその基体表現 NP1」, 西山編『名詞句の世界』65-82, ひつじ書房.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房.

西山佑司編 (2013) 『名詞句の世界』ひつじ書房.

Nisisawa, H. Y. & Miyata, S. (2009) . Japanese - MiiPro - Nanami Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-473-7.

野地潤家 (1973-77) 『幼児言語の生活の実態 I~ IV』文化評論出版.

Noji, J., Naka, N., & Miyata, S. (2004) . Japanese - Noji Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-058-8.

Radford, A. (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Basil Blackwell.

Taylor, J.R. (1996) *Possessive in English*. Oxford University Press.

Tomasello, M. (1992) *First Verbs*. Cambridge University Press.

Tsujioka, T. (2002) *The Syntax of Possession in Japanese*. Routledge.

Acquisition of Possessive Sentences and Related Expressions in Japanese

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language
Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

This paper contemplates the course of the development of the possessive sentence and the absolute existential sentence in Japanese. The possessive sentence is formed in the manner of NP1 {*mi/wa/niwa*} NP2 *ga aru*, (NP1 {a locative and/or topical particle or particles} NP2 a nominative particle “be”) ‘NP1 has NP2.’ An absolute existential sentence is formed in the way of NP1 *no* NP2 *ga aru*, (NP1 a genitive particle NP2 a nominative particle “be”) ‘NP1’s NP2 exists.’ Some postulations are made in this paper with regard to the fully developed possessive sentence. The semantic structure of the possessive sentence comprises the arrangement of the absolute existential sentence including a possessive noun phrase. The syntactic structure of the possessive sentence comprises the configuration of a possessive noun phrase in its underlying organization. The possessive sentence is believed to be related to the absolute existential sentence in the adult usage of Japanese. The development processes of both sentence structures in children are compared, and the relations among them are examined. Four findings are revealed:

- (1) Children begin to use an absolute existential sentence at the age of 2 or 3, the same time as they begin to use a possessive sentence.
- (2) The range of semantic relations between NP1 and NP2 as expressed in absolute existential sentences is narrower when used by children than in adult statements. Type A, the pragmatically mediated semantic relations between NP1 and NP2, is most commonly used by children.
- (3) The range of the semantic relations between NP1 and NP2 as expressed in possessive sentences is also narrower when used by children than in adult statements. Type F, the inalienable NP2 and its base NP1, are the most frequently used forms by children.
- (4) Type F possessive sentences are more similar to locative existential sentences when used by children than absolute existential sentences. Japanese 2 or 3-year-olds are sensitive to the semantic characteristics of noun phrases: an alienable and inalienable NP. The toddlers seem to use the two elements quite differently; they use the alienable NP in the absolute existential sentence and the inalienable NP in the possessive sentence. They utilize the verb *aru* or “be” in a meaning that is closer to “existence.” Children also use the NP2 as a referential noun phrase in a possessive sentence, although adults use the verb with little substantive content and employ the NP2 as a noun phrase with a variable.

Key words : Possessive Sentences in Japanese, Absolute Existential Sentences, Possessive Noun Phrases, Child Language Acquisition

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., 68, 21-30, 2019.